

多和田葉子氏公開講演会報告

谷口幸代*

2015年8月4日、お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構グローバルリーダーシップ研究所では、日独バイリンガル作家の多和田葉子氏を迎えて公開講演会「犬婿から白熊へ一本という不思議な動物―」を開催した。国際的な視野に立って活躍するということについて、世界文学の先端を切りひらく作家のキャリア形成を通して考える場として企画したものである。比較日本学教育研究センターとの共催により実現した企画であることから、ここにその概要を報告する機会を得た。

なお、この講演会と比較日本学教育研究センターの活動との関係をさらに補足すれば、昨年度、比較日本学教育研究センターの主催、グローバルリーダーシップ研究所の前身にあたるリーダーシップ養成教育研究センターとの共催で開催された第16回国際日本学シンポジウムにおいて、私は第2セッション「越境する文学の諸相―ことばを越える・ジャンルを越える―」を企画し、私自身も「多和田葉子の文学における境界」というテーマで報告した。今回の講演会はそのセッションの趣旨を受け継ぐものでもある。日本語とドイツ語の両言語で創作し、小説を書くことは世界の文学史の中で書くことだと語る多和田氏の講演は、当然ながら比較日本学という観点から見ても極めて意義深いものである。そこで以下ではそうした観点からの報告を試みたい。

講師として迎えた多和田氏はドイツを拠点にしながら朗読会等で文字通り世界を飛び回って活躍

されており、そのため多和田文学は言語や文化の境界を越えるその旅の途上で創造されるといってよい。今回の講演会の演題も多和田氏らしくスイスのルガノから届けられた。

「犬婿から白熊へ」の〈犬婿〉と〈白熊〉とはいずれも多和田氏の小説に由来する。すなわち、異類婚姻譚の一つである犬婿譚を下敷きにした芥川賞受賞作「犬婿入り」(『群像』、1992・12)と白熊の三代記の枠組みで書かれた小説『雪の練習生』(2011・1、新潮社)である。多和田氏は、日本でデビューして20年という節目にあたる2011年に、『雪の練習生』で野間文芸賞を受賞されたが、その際に、「犬から熊へたどり着くまでに二十年かかりました」と多和田文学の展開を振り返られた。したがって、「犬婿から白熊へ一本という不思議な動物―」という演題は、本を「不思議な動物」ととらえる独自の視点に立ち、本との関わりから作家多和田葉子の歩みを自らが語る貴重な講演であることを意味していることになる。

作家多和田葉子誕生において重要な位置にある本として具体的に取り上げられたのは、子ども時代に読んだ絵本、手製の本、ドイツで初めて出版された二カ国語詩文集である。

まず子ども時代に読んだ絵本の例として、2歳頃に文字の書かれていない絵本を好んで読み、本物のコップやタンポポや犬よりも絵本に描かれたそれらに魅了されていたとの話が紹介された。多和田氏は、本の中にもう一つの現実があることを2歳の子どものさえも感じ取っていたのではないかと語った。

その本はもう残っていないとのことで代りに忘

*お茶の水女子大学准教授

れられない本として持参されたのが、小学校に入る前から購読していたという福音館のシリーズ「こどものとも」の一冊、『punk マインチャ』（大塚勇三再話、秋野玄左筆画、1968・2）である。ネパール民話に基づく、この継子譚が印象に残っている理由に、主人公の名前をつけたタイトルの不思議な響き、ヤギとキツネという複数の動物がひとつの動物の体の中に入った迫力ある「雑種」であるドーン・チョーレチャの存在感、絵の色彩感覚や線の魅力、以上の三点を挙げられた。第一の点に関して、人間の脳にはことばの響きの面白さや強烈さだけが記憶される部屋のようなものがあるのではないかと述べ、そのように音と意味が直結しない確かな存在感を放つ言葉は詩を書く起点になるとの考えを示された。第二の点に関して、動物が民話の中で人間よりもすぐれたもの、あるいは人間の弱点を補ってくれるものとして登場する点に興味を持ったとし、そのような関心のありようが後に「犬婿入り」執筆につながったという。第三の点に関して、日本的な挿絵とは異なる色彩や力強い線は、ネパールという国をまだ知らなかった子ども時代に、自分がその時所属している文化とは異なる文化があるということを感じさせてくれたという。

続いて取り上げられたのは自作の本についてである。「こどものとも」愛読後、さらにいろいろな本を読むようになった多和田氏は公共図書館で本を借りるようになり、本というものを所有することへの思い入れが逆説的に強まったことから、やがて自分で本を作ることを思い立ったという。それは原稿用紙を二つ折りにして綴じたり、蠟原紙に鉄筆で文章を書いてガリ版で印刷したりして作られた手製の本である。前者は世界に一冊しかなく、後者も50部程度の限定品であることから、大量生産された商品としての本とは性質を異にし、その意味で後にドイツに渡って出会うことになったアーティストブックと共通する点があると説明された。

アーティストブックとは作家がアーティスト

と共同で制作する、一冊一冊がアートとしての価値をもつ本である。多和田氏自身も、アーティストのシュテファン・クーラー氏（Stephan Köhler）とブックデザイナーのトビアス・ランゲ氏（Clemens-Tobias Lange）とともに“Ein Gedicht für ein Buch”（1996, CTL Presse）というアーティストブックを制作したことがある。多和田氏が詩を書き、クーラー氏が本を読む人たちの姿を写した写真を手すきの雁皮紙に焼き付け、ランゲ氏がエイの皮で表紙をつけた限定45部の本である（『カタコトのうわごと』参照、1999・5、青土社）。

早稲田大学でロシア文学を専攻した多和田氏は、在学中の1979年にシベリア鉄道でヨーロッパを訪れた。多和田氏はその経験について、それまでは本を読むことを通して世界中へ旅をしていたのが、本の外へと旅立つことになったのだと表現された。さらに大学卒業後にはドイツに渡り、書籍取次店勤務、ハンブルク大学進学を経て、1987年に第一著書となる二ヶ国語詩文集“あなたのいるところだけ何もない Nur da wo du bist da ist nichts”がドイツの出版社コンクルスブーフ社（Konkursbuch Verlag）より出版されるに至った。

同書には多和田氏の日本語作品とペーター・ペルトナー氏（Peter Pörtner）によるドイツ語訳が収録されているが、通常の見出し詩集とは趣を異にし、日本語作品は縦書きで、ドイツ語訳は横書きで記載され、かつ日本語版の表紙とドイツ語版の表紙が付されており、それらは表紙／裏表紙の関係にはない。つまり、一冊の本でありながら、縦書きの右綴じと横書きの左綴じ、両方の体裁をとる異色の本である。目次も日独両バージョンが付されているが、日本語版の目次は作品の掲載順ではなく、題名の五十音順に並んでいる。

このような破格の造本に関して、多和田氏は本を読むということは単に内容を読むことだけではなく、紙をさわったり、ページをめくったりする感覚が重要であり、そのような考えに基づき、日本語作品は縦書きで右綴じ、ドイツ語作品は横書きの左綴じで、それぞれページをめくって読む本

にしたかったのだと振り返られた。多和田氏によれば、紙の本の場合、読み手は読んだ内容を記憶するのみならず、それが本のどのあたりの場所に書いてあったかということも記憶するのであるから、本は読むものであると同時に記憶の場所でもある。“あなたのいるところだけ何もない Nur da wo du bist da ist nichts” に付された序文「はじめに―又は、使用説明書―」は、こうした多和田氏の本に対する思いがこめられたものといえよう。

めくるとめぐること、めぐむこととめぐりあうことの関係に心をめぐらせながら、この奇妙な本、横文字に挟まれながら、その狭間を上から下へ雨と降る日本語の文字のイラストとしての役割とオリジナルであるという仮面、詩は一篇ごとにドイツ語訳に追いかけられ、訳される時間に書かれる時間はぬかれ、ぬきかえし、又、小説はドイツ語訳と左右から睨み合い、しかも一方は前から後へ、もう一方は後から前へ語られる、ふたつのテキストはひとつの穴をはさんで向かい合う二枚の何も映さない鏡、めぐり続けるうちに本そのものがひとつの穴になってしまう本当の対訳詩集を夢みながら、できあがった「これ」をあなたに贈ります。

ご講演の中では、このページをめくる快樂と読むことの快樂を味わわせてくれる“あなたのいるところだけ何もない Nur da wo du bist da ist nichts” から、収録作品の一篇「事件」の朗読をしていた。日本語で書きたいという思いにかられ、日本語で文章を書く一文ごとに感情の爆発のような動きがあった、そういう状況下で意味ではなく映像のつながりから創作された詩だという。奔放なイメージを駆使した詩の朗読に聴衆は一気に惹きつけられた。

さらにもう一篇「魚説経」を言葉遊びのテキストの例として朗読してくださった。多和田氏は“あなたのいるところだけ何もない Nur da wo du bist da ist nichts” 刊行後、ご自身でドイツ語でも創作されるようになり、日本語との付き合い方

が母語ではなく外国語として見るように変わっていき、その中で言葉遊びを取り入れたテキストを書くようになったという。「魚説経」は、俄か坊主がでたらめで魚の名前尽くしの説経を始める狂言のパターンを借りて創作されたパフォーマンステキストである。「鮭鱒 自分に都合の悪い話は」と始まるテキストはユーモアに包んで社会を鋭く諷刺する。魚の名前が織り込まれる箇所では自作の魚の絵を掲げられ、サービス満点のパフォーマンスに拍手喝采となった。

多和田氏は、以上の刺激的な講演を締めくくりにあたり、人間の脳は固定化された価値観のもとで話されるような最初から理屈がわかっているものを聞くときには眠ってしまうが、反対に言葉遊びによって活性化する、したがって小説家が言葉遊びを取り入れたり、ナンセンスな作品を書いたりすることは今の時代に非常に大切なことではないかと述べられた。

引き続き行われた質疑応答の部も、講談社の協力により『尼僧のキューピッドの弓』（2010・7、講談社）が多和田氏から質問者に贈られるというサプライズもあり、大いに盛り上がった。話題は多岐に広がり、創作に関わる質疑にしばってみても有意義な対話が実現した。たとえば、講演での「世界の文学史の中にあって書く」という発言に関連して、どのような位置づけで創作されているのかという問いに対して、広く動物が登場する日本文学とは異なり、ヨーロッパ文学の場合は動物が主人公として出てくると児童文学になってしまうということを紹介された。そういうヨーロッパ文学の中でフランツ・カフカは例外的位置にある、そのカフカのように特殊だが非常に重要な文学の流れ（他にはドストエフスキーやツェランの名を挙げられた）にアジアの神話の世界から近づく作家という捉え方もできると、ご自身の作家としての位置を説明されるとともに、二ヶ国語で書くことや、言葉と世界の関わりをテーマにしたエッセイ集『エクソフォニー』（2003・8、岩波書店）に現れているように旅をしながら思考することの意

味についても言及された。

またその『エクソフォニー』で「一つの言語しかできない作家であっても、創作活動を何らかの形で「選び取って」いるのでなければ文学とは言えない。」(第1部第1章「ダカール」)と記されていることに関して、なぜドイツ語と日本語を創作言語として選択されたのかという質問があった。これに対して、多和田氏はドイツ語やロシア語のように古い構造が残っている言語に惹かれたが、大学卒業当時はソ連で生活して小説を書くのは無理な状況にあり、いっぽうドイツではドイツ人だけではなく東欧やイスラム圏からの亡命者たちもいてアメリカとはまた異なる国際性があり、いろいろな国から来た人がドイツ語で書いている現象に強い興味を感じたと述べられた。それに加えて、「選ぶ取る」ということの意味について、スーパー等に陳列されている商品を選ぶのとは違い、亡命作家の場合、その国に行くしかなかったという状況がまずあり、そこで何を選び取るのかという問題として考えるべきだとされ、ちょうど国際中欧・東欧研究協議会(The International Council for Central and East European Studies)の幕張世界大会で来日中だったミハイル・シーシキン氏(Mikhail Shishkin)の事例を紹介された。モスクワで生まれたシーシキン氏は現在はスイスで暮らし、ロシア語で敢えて書き続けている。

その他、多和田氏の作品に関する応答では、創作と時代背景との関わりに関する質問に対して、『雲をつかむ話』(2012・4、講談社)を例に挙げて答えられた。それまでに出会った犯人について書くというアイデアで書き始めたのが、法律とは何か、国が法律を破った場合はどうなるのかと疑問が次々にわいてきて、そこへ福島第一原発の事故が起こり、その現実の出来事が反映されることになったと説明された。また『飛魂』(1998・5、講談社)で「亀鏡」「梨水」といった登場人物名に読み仮名が振られていないことの意図を問う質問に対して、ちょうど中国語を解しない日本語話者が中国の古典を眺めるときのように、日本語と

して読めばこう読めるが中国語ではどう発音するのか、と想像をめぐらせる感覚で、文字としての魅力を最大限に出したいと考えて執筆した作品だと説明があった。

他作家に関する質問では、石牟礼道子の文学への意見が求められ、土着的な作家と語られることが多いが、むしろポストモダンの作家としてとらえることができると述べられた。

より広い質問では、暗い世の中に対して文学がもつ力が問われた。その問いに対して、文学は世の中を直接的に明るくはしなくとも、世の中の暗さや問題となっている事柄を言葉にすることで、読み手が距離をもってそれらを受けとめることができるようになる、それが文学の果たす重要な役割だという見解を示された。また多和田文学における読者像の変遷に関しては、ドイツにおいて日本語で小説を書き始めたときには日本の読者がどう読むのか想像しにくく、そのため読者に向けて書くというよりは、自分の中の日本語、あるいは遠くにある日本語に向けて書き、読者はその後で登場してくる感じだったと答えられた。文学における〈意味〉をどう考えるかという質問に対しては、複数の意味の可能性を含む、一義性に反抗するような書き方をめざしている、一つのメッセージをもつ小説ではなく網目のような小説を書いていきたいと、多和田文学の基本的姿勢が鮮やかに示された。

以上のように講演、質疑とも非常に充実したものとなった。終了後のアンケートでも、「文学や言語、本という物体について新しい視野が開かれました。」「自分の凝り固まった考え方をほぐすような言葉をたくさん頂けた講演会だった。」「詩の朗読を拝聴した時に、「なんだこれは!？」と脳が大回転を始めたのを感じました。」といった声が寄せられた。